BATTLE BALLER HARUKA

Ⅰ－4

美しき刺客

（前編）

Ψ

バトルボーラーはるか

第一集
バトルボール(神気珠玉)

第４章

美しき刺客
（前編）

作・Ψ　**(Eternity Flame)**

「オッハヨーッ。」
　いつにも増して陽気に朝の挨拶をするはるか。それは、昨夜に衝撃的(しょうげきてき)な事件に遭遇(そうぐう)した沙織を気遣(きづか)っての物なのだろうか。
「おはよう、はるか。」
昨日の事が尾を引いているのか、沙織(さおり)は元気がない。いつもならもっと声高(こえだか)に返すのだが…
「沙織…大丈夫？」
「えっ？あぁゴメン。ぼーっとしてたー。」
　心配そうなはるかの表情に気付き、逆に謝(あやま)ってしまった沙織。考え事をしていたかのように見せかけてはいるが。意識し合う二人はぎこちない会話が続いた。
「オハヨウゴザイマスゥ。」
「あっ!ピエール先生ぇ！おはようございまぁーす。」
「先生、お話があります。ちょっとお耳をいいですか？」
「ナンデショウカ？」
「弟さんの事ですが…。」
「…本当デスカ!!アリガトウゴザイマスゥ。」
「はるかぁ、ジャン･ピエールはあれからどうなったのぉ～？」
「今、それを先生に耳うちしてたんだけど。彼は病院に居るって先生に言ったの。」
「…そうなんだぁ。」
「昨日の事なんだけど、色々、迷惑かけてゴメンね。」
「そんな、気にしてないってばー…」
「それから、放課後いっしょにお兄ちゃんのお店で話したいんだけど、時間大丈夫かな？」
「ダイジョウブだけどぉ。あのねー…中国のすごーい美人さんが胡弓(こきゅう)のコンサートやるんだよぉ。チケットくれたから一緒に行ってぇー。」
「う、うん。いいよ。」
「やったぁー！！」

間延(まの)びした沙織の口調を最後まで聞かず、要件を述べるはるか。それに自分の楽しみをちゃっかり付け加える沙織。ようやく二人は自然な関係を取り戻していた。
―放課後
想いを寄せる秀樹に会えるのが嬉しく、朝方とはうってかわり、沙織は上機嫌(じょうきげん)であった。
「はるかー、早くしないとバスに乗り遅れるよぉー。」
「１本ずらそうよ。」
「ダメダメ!!早くしないとお店混んじゃうもーん。」
「大丈夫よ。」
「なんでぇ？」
「今日はお店休みだから。」
せっかくの和やかな雰囲気(ふんいき)を台無しにしたくなかったのか。
後ろめたそうだが、仕方ないといった表情で、はるかは沙織に話を切り出す。
「実は、話って昨日の事に関する事なんだ。」
「えっ？」
「お兄ちゃんは私の兄弟子なの。」
「兄弟子って、あのぉ…」
「そう。昨日、私が使った拳法よ。」
「そんな…」
危惧(きぐ)していた通り、沙織が暗くなった。
はるかは気まずくなり、それ以上は沙織に対して何も言えなくなり、賑(にぎ)やかなバスの中で二人の空間だけが鎮(しず)まり返っていた。やがてバスが八万町(はちまんちょう)の停留所に着くと、そこに秀樹(ひでき)が待ち構えていて、はるかは内心ホッとした。
店まで歩く間もこの沈黙(ちんもく)が続くかと思っていたが、沙織は秀樹を見ると少し明るくなったからである。
しかし、すぐに沙織の表情がしょげた感じになったので、秀樹は戸惑(とまど)いを隠せずにいた。

「秀樹お兄さん…」
「沙織ちゃん。…はるかから俺の事聞いたんだね。」
「う…ん。」
「ごめんね。隠そうとしてた訳じゃないんだけど。心配させちゃったね。」
「そんな…なんか私…うまく言えないんだけど…グスン…。」
「沙織ちゃん！」
「沙織…とにかくお店に行って落ち着こっ。ねっ！」
「…うん。ごめんなさい。いきなり泣いてびっくりさせちゃって…」
「気にしなくていいよ、沙織ちゃん。さ、行こッ。」
若い女の子に、昨晩からの出来事はよほどショックだったのか。涙目の沙織に秀樹はうろたえている。はるかだけでなく、密かに慕(した)っている秀樹までもが、あのような修羅場(しゅらば)を潜(くぐ)っているのかと思うと、沙織は心配でたまらなかった。
店に着いても、しばらく「しーん」としていたが、その静寂(せいじゃく)を破ったのは意外にも沙織自身からであった。
「…はるか。」
「えっ。なぁに？」
「…話って何なのぉ？」
「あぁ。うん、そうだね話はーっと…」
「俺から話そう。沙織ちゃん、昨日の事は覚えてるよね。」
「…うん。」
「実は徳島に眠るとされる、ある財宝を悪いヤツらが狙ってて、 はるかと俺はそれを守ってるんだ。」
「じゃあ、秀樹お兄さんもはるかみたいな拳法を？」
「使えるよ、はるかとはちょっと違うけどね。」
「違う？…どういう風にぃ？」
「フェニックス心拳の話は聞いたよね？」
「うん。」
「神と言われる存在から生れた力は、炎だけじゃないって事だよ。」

「そうなんだ…」
「それはともかく。師匠が言うには、沙織ちゃんにしばらくの間、はるかの傍(そば)で力になってやって欲しいって言うんだ。」
「私に力なんてなれるのかなぁ…。」
「勿論(もちろん)なれるさ。はるかも出来るだけ沙織ちゃんといて、お互いが助け合えるようにしないとイケないけどね。敵の尻尾が摑(つか)めないから、今は一人でも多くの味方が欲しいし、近しい存在なら連絡も密に取れるからもってこいだよ。」
「どんな事をすればいいんですかぁ？」
「昨日、沙織ちゃん達は突然に襲われたけど、敵は僕達の情報をどうしたのやら嗅ぎつけた。だから網を張るようなつもりで、注意して待ち構えてればいいと思う。というか、それしか手はないと言った方が適確かな。」
秀樹のその言葉を聴(き)いて、沙織の顔がかなり元気を取り戻したのが見てとれた。疎外感(そがいかん)や不安感が、秀樹のケアの甲斐(かい)あって消えたからであった。何よりも、沙織には秀樹達と行動を共にできそうな運びになり、仲間に加えてもらえたような感じがしたのが嬉しかったのである。
「お兄ちゃん。」
「何だい？はるか。」
「私の使う炎以外に他にどんな使い手がいるの？」
「師匠から聞いた話では７つだと言ってたな。」
「私のも入れて８つ…か。」
「あぁ。ダークエンジェルズの全貌(ぜんぼう)は全くの未知数だが、それだけははっきりしてて、オレの水、その他に地･風･雷･氷･虚とあって、それらを束ねる〝女帝〟と呼ばれる存在がいる。その女帝が使う闇の力が暗黒鳳凰(ルシファー)心拳で、全部で８つだ。」
「ルシファー心拳・・・」
「心拳が８つあるのははっきりしてるが、誰が何を使うとか誰が敵なのかは分からない。」

「何故、ルシファー心拳をその〝女帝〟と言われる女が使うって事だけ、はっきりしてるの？」
「聖書にもある黒い竜。それは神に反逆した者が生み出した闇の力。 サタンとも呼ばれる存在は、その者が生みだした暗黒の力が形を成した物だったんだ。」
「じゃあ悪魔というのは…」
「そう、闇に与(くみ)した心拳使いの事だよ。」
「そんな…」
「闇は巧妙(こうみょう)かつ狡猾(こうかつ)に人の心に忍び込み、虜(とりこ)にする。神と悪魔。光と闇の勢力の戦いと、それらに翻弄(ほんろう)された者達の心の葛藤(かっとう)を綴(つづ)ったのが、歴史ある聖書の内容だ。セナケリブ王の軍隊を滅(めっ)した雷。ダビデがゴリアテという巨人を倒したのは、〝スリング〟と呼ばれる投げ石だと言われてるけど、それらは８大心拳と言われる、オレ達の先祖が繰り出した技だったんだ。」
「闇だけがはっきりしてる…」
「そう、炎が持つ光と、闇は相(あい)入(い)れない対極的(たいきょくてき)存在(そんざい)だが、他は流動的(りゅうどうてき)なんだ。昼と夜、陰と陽のように、炎と闇は本来は物事の表裏一体性を象徴(しょうちょう)する存在であったんだが…炎に敵対する事により、性質を異にした。絶対的存在の神に対して、魔の存在も絶対的であるゆえに明確(めいかく)に存在が認められて いる。」
「光あれ、と言って生まれた炎に叛逆(はんぎゃく)した黒い竜…対極的ってコトはぁ…それは黒い炎を使う心拳の使い手がいるって事なのかな…?」
ルシファー心拳という名にピンときた沙織がそう呟(つぶや)いた。
「その通りだよ沙織ちゃん！スゴいね。」
「えへへ。それほどでもぉ…」

「その他は五行説の五行のような物…でしょ？」
「そうだよ、はるか。オレの持つ水や、その他の属性(ぞくせい)も根元は同じ。親と子のような関係…かな。」
「親と子…。」
「時間的な差異(さい)とか変化はあっても、この８大要素から万象(ばんしょう)が成り立ってるってコトさ。あと敵味方の話に戻るが。現在は俺の水の力と、風の使い手が味方なのだけは、はっきりしている。その内に風の使い手は紹介するよ。後は絶対的な仇敵(きゅうてき)である、ルシファー心拳についてなんだが…」
「情報があるの？」
「いや、これは話すべき時が来たら話そう。沙織ちゃん、何か訊(き)きたい事はない？」
「いえ…まだ何が何だか分かんない感じでぇ…」
「そりゃそうだよね。…はるかは？」
「ううん。今はないわ。」
「そうか。お前達を狙ってる組織については、俺も調べてるから、分かった事があったら伝えるよ。堅い話はここら辺にして晩ご飯でも食べに行こうか。」
「お兄ちゃん、私達この後予定があるから。」
「そうなのか。じゃあ、ここで食ってけよ。」
「そうしよっか沙織？」
「えっ？…う、うん。」
少し夕飯には早かったが、コンサートの開演時間が早めだったので、移動時間を差し引くとこの時間となった。秀樹の巧(たく)みなトークが下地にあったのも手伝ったが、大好きなはるかと秀樹の二人と一緒に食事を摂(と)った事で、沙織は徐々(じょじょ)に落ち着きを取り戻していた。

　コンサートへのバスに向かう間際(まぎわ)には、いつものように二人の間に笑いが起こるようになっていた。
「ハハハハ…やだぁ、秀樹お兄さんたらぁ。」
「沙織、もう行かなきゃ時間じゃないの？」
「あっ、そうだぁ。お兄さん、それじゃ行ってきますねぇー。」
「気をつけてな。」
コンサート会場―
「チケットは持ってるの？」
「うん。これぇー。」
「へぇー、写真入りなんだ。綺麗な黒髪。」
「顔も美人でしょぉ?」
「そうだね。」
「チャン･リンシャン…。この胡弓(こきゅう)持ってる人の名前かなぁー？」
「多分そうでしょ。」
「ホント美人だねー！生で見るともっと美人かなぁー。」
「神鵰侠侶(ｼﾝﾁｮｳｷｮｳﾘｮ)に出てくるヤン･ミーみたいな感じの美人だね！」
「誰、その女ぉ？」
「郭襄(かくじょう)って姫役でいたじゃない。」
「あぁ、思いだしたぁ！似てるねぇー。」
　無類のドラマ好きのはるかに付き合う形で、二人は韓流を初めとする国内外の様々なドラマを観ていて、そう言う話になったのだが、チャイナドレスでステージに現れたその女性は、ヤン･ミーに勝るとも劣らない美貌(びぼう)であった。まるで本物のヤン･ミーのような美しさ。スポットライトの光を纏(まと)った黒髪が、一段とそのつややかさを極(きわ)だて彼女の白い肌をさらに引き立てている。
　「綺麗な女だねぇ。」
見とれるあまり、一人言を言うような感じで沙織がそう眩いた。
　「そうだね。」
　「胡弓の音色もスゴくいぃ…」

チャン･リンシャンの美しく優雅(ゆうが)な顔立ちや、胡弓(こきゅう)の音色の醸(かも)し出す雰囲気に、沙織は酔(よ)っているようだった。昨日からのかつてない緊張の連続からくるストレスは、精神的に沙織を疲労困憊(ひろうこんぱい)させていたのかも知れない。ゆったりとした胡弓(こきゅう)の音色に、心を委(ゆだ)ね休ませているようであった。あっという間に何曲か弾き終えると、チャン･リンシャン本人が、マイクを手に観客に挨拶をしだした。

「徳島の皆さん、こんばんは…」

中国人とは思えないほどの流暢(りゅうちょう)な日本語。観客とのＭＣでは「何故そんなに日本語が上手なのですか？」という質問に、日本に興味があるからと答え、観客を喜ばせたりしていた。しかし、はるかだけはその和やかな会場のムードに、なじめていない様子であった。

「…どうしたのー？はるかぁ。」

「えっ！？何が？」

「何かさぁ、浮かない顔してるよぉ。」

「う…うん。上手く言えないけど、あの女(ひと)には異質な感じを受けて…」

リンシャンの胡弓(こきゅう)と容姿(ようし)にうっとりして、すっかり気を取り直した沙織には、それがどういう意味なのか理解できないようである。

「体の調子が悪いのかなぁ？」

「違うわ。何かこう…胸さわぎがするの。」

言い知れぬ不安感を抱くはるかであったが、折角(せっかく)の沙織の気分を害したくないらしく、平静を装う事とした。

しかし…公演終了間際。会場全体を見向きしていたリンシャンの視線が、はるかに合った時。閃光(せんこう)と共に全身が痺(しび)れるような感覚が、はるかを襲った。

「あぁッ…！！」

「どうしたの?はるかッ！？」

「…今、何か電気が走ったような…」

「具合悪いのかなぁ。演奏も終わったしぃ、もう帰ろっかぁー？」

「…うん。」

コンサート会場のある徳島市内は川に囲まれ、別名〝ひょうたん島〟と市民からは呼ばれている。川筋は公園となっており、昼間はサラリーマンや老人・子供達の憩(いこ)いの場となっている。

しかし、夜中は人通りもほとんどなく、一足早く会場を出た二人を心地よい川風が吹き抜けている。バスが来るまでの間、二人はその川風にあたっている事にした。

「気分治ったぁ？」

「うん。もう大丈夫。」

「風、気持ちいいねぇ！」

「うん。気持ちいいね。」

シュッ…

爽(さわ)やかな夜風を切り裂(さ)く鋭(するど)い音がした！！

「危ないッ！」

「キャッ！？」

刃物のような物体を見たはるかが、それに気付いていない沙織を突き飛ばした!!地に突き立った刃は日本にはない形をしていたッ！！

「よく躱(かわ)したわね。フフフフ…」

「誰ッ！？」

はるかの呼びかけに、暗がりより現れたのは二人の女であった。それもどうやら中国人らしく、拳法家の道着を上下に着ている。真っ黒な道着を上下に揃(そろ)えた女達は二手に分かれ、はるかと沙織の前に立った。

「アンタが不死鳥(フェニックス)心拳の使い手ね？」

「あなたは誰？名乗りなさいよ。」

「私はイーフェイ。おとなしくソロモンの秘宝の在り処を教えなさい。」

「そんなの知らないわ。」

「そう。なら力ずくで吐かせてあげる。」

菅笠(すげがさ)のような被り物からおもむろに取り出された短刀。取り出すなり手のモーションは急激に速くなり、闇に黒い道着が紛れる事もあいまって、軌道(きどう)が予測し辛い。
更(さら)にナイフまでもが黒く塗られていて、そのスピードさえも目で捕(と)らえられないッ！！
「はるかッ！！」
「あなたの相手はこのジンインよ。」
はるかを助けに行こうとする沙織に立ちはだかったジンイン。両手に短刀を握(にぎ)り、接近戦に持ち込まれた沙織は、その技の速さに防戦一方だッ。
「沙織ッ！？」
「スキあり！！もらったーッ。」
あぁーッと！！沙織の事に気を取られたはるかの、制服の胸元を数本のナイフが貫いたーーッ！！
「はるかーーッ！！」
その光景が目に入った沙織は思わずそう呼び、自分の窮地(きゅうち)も顧(かえり)みず駆け寄ろうとして、ジンインに切りつけられ、その場に倒れこんだッ！！
「チッ、捕まえるつもりだったのに…殺したか。」
イーフェイはそう言って倒れたはるかを見ると…
「何！？いないッ？？」
そこにはナイフが刺さった制服があるだけで、もぬけの殻(から)だったーッ！！その刹那(せつな)―
ドゥブ
「キャーーッ!?」
ドゴゴゴゴーー。
鈍(にぶ)い音。それにつぎ、悲鳴(ひめい)と何かが跳ね飛ばされ、地を這(は)いずり回る音がしたッ。

「はるか！？」
吹き飛ばされたのはイーフェイであった。制服を素早く脱ぎ去り、上に飛び上がったはるかは、イーフェイの後ろ手に回り、背中へミドルキックを浴びせたのである！！
イーフェイが捉(とら)えたように見えたのは残像(ざんぞう)であったーーーッ！！傷口を押さえながら、その光景を目撃した沙織は安堵(あんど)したようであった。
「チィ…死ねぇッ！！」
それを見ていたジンインがキレてしまい、沙織にトドメを刺そうとしたーッ！！
「キャアァァーー！！」
「沙織ッ！！」
はるかが助けに行こうとするが間に合わないッ。
シュッ。
乾いた風の音がしたッ。形のない一陣の疾風(しっぷう)のようだったが…
パリーン。
「なっ何ィー！？私の飛刀が…」
その疾風(しっぷう)が、なんとジンインが沙織に突き立てようとした飛刀(ひとう)を、粉々に砕(くだ)いていたーッ！！
「あんまし女の子をイジめるモンじゃないぜ！！」
「何奴(なにやつ)！？」
「オレか？通りすがりのイケメンとでも言っておこうか。」
「ふざけるなぁーッ！！」
「おっと。」
ジンインの息つまる連続攻撃を、意にも介(かい)さずといった感じで軽快(けいかい)にかわす男。
「あれッ？こんな所に脱ぎ捨てた制服が…するとあそこに立ってる娘は下着かなぁ～♪へへへ。」
「貴様(きさま)、ちゃんと戦えーッ。」
「嫌なこった。あッ！いたいた！！大丈夫ー？そこのお姉ちゃーん♪」

「くっ…喰らえーッ!!」
のらりくらりと、まるで風に流れる柳(やなぎ)のように捉(とら)え所のない男の動き。苛立(いらだ)ったジンインはありったけの飛刀(ひとう)を投げつけた。
「ありゃ、ヤバい。」
「死ねッ！！」
右に左に人間離れしたスピードでバク転し、攻撃をかわしながら、はるかの元へと男は近付いた。
「お姉さーん。大丈夫…ッて…お前、はるかじゃん！？」
「…正(まさ)…友(とも)…？」
「そうだよ。何だよー、お前だったのかよ。下着姿のカワイ子ちゃんかと思って期待してたのによォ～。」
「何よー！」
「それに何だよ、その真っ赤な上下のレザーはよォ。」
「コレは戦闘用の衣装(いしょう)よーッ！！」
「お前、そんなの制服の下に着てんのかよ？」
「悪いッ？」
「もうちょっと色気あるもん着ろよー。」
「馬ッ鹿じゃないのッ…はっ！？それよりもう一人の敵が…沙織は？」
「あっちでうずくまってた娘のことか？大丈夫だよ。なんか襲(おそ)われてたみたいだけど助けといたから。」
「敵は？」
「あぁ、なんかいきなり俺に斬り掛(きりか)かってきたヤツなら、飲んでたジュース投げ付けといたから、今頃、悶絶(もんぜつ)してんじゃね。」
「そう…良かった。」
はるかと正友が沙織の元へ行くと、倒れている筈(はず)のジンインの姿が無かった。

「あれッ？アイツ仕留(しと)めたハズなのにいねーなぁ。」
「沙織、大丈夫？」
「うん。あ痛ッ！」
「見せてみて。やだっ…血が滲(にじ)んでる！」
そう言うと、はるかは沙織の傷に手を当てた。すると朱(あか)い色の光が灯(とも)り、傷口が塞(ふさ)がり元の状態に戻った。
「お前、フェニックス心拳が使えるようになったんだな。」
「うん。」
「はるか…コレはぁ？」
「炎は生命を生み出した。フェニックス心拳には、こういう使い道もあるの。」
「そうなんだ…じゃあ何か色々あってもぉ、恐い物なしだねぇー。」
か弱いように見えて、女の子とは意外とタフだったりもする。昨日からの修羅場(しゅらば)や、理解し難(がた)い話の連続に戸惑(とまど)いながらも、力強く生きようしている沙織が明るくそう言い放った。
「それより正友は何しに来たの？」
「何ってお前、ヤツらが動き出したそうじゃないか。」
「あぁ…うん。」
「秀さんから聞いたから助けに来たんだよ。」
「あっそう。」
「はるかぁ。この人だぁれ？」
「私の兄弟子の正友よ。ウチの師匠の弟弟子の弟子ね。」
「じゃあこの人もぉ、はるかみたいな技使うのぉー？」
「アンタ何か使えたッけ？」
「バッカ。お前、知らねぇの?俺は風を使うんだよ。そりゃースゲェんだぞ！」
「ふーん。」
「ムカつくわー…その返事。お前、俺のジツリキ見てオシッコちびるなよ！」
「バーカ。何がジツリキよ…」

「ところで沙織ちゃんって言ったかな。秀さんから話は聞いてる。俺は正友。これから君は僕が守るから安心しててね！」
「何カッコつけてんのよ。もう行くよ。」
「アイツら追わないのか？」
「コンサート会場に逃げられちゃってたら、どうやって探すのよ！」
「そっか。沙織ちゃん、おんぶしたげようか？」
「ダメよ、沙織!こんな事言って、コイツお尻触ろうとしてるんだから。」
「バカ。俺がそんな事する訳ないだろッ。俺は足フェチなんだぞ！！」
「ホント馬鹿！沙織、行こッ。」
「だからこう～フトモモを…あっ、おい待てよッ！！」
消息(しょうそく)のつかめないジンインとイーフェイ。追う事を諦(あきら)め帰路へと着くはるか達は、高階(たかしな)より見られている事に気付いていなかった。
「醜態(しゅうたい)を晒(さら)しました。申し訳ありませんチャン様。」
「…よい。あの者達をつけなさい。それと、シャラポワ･ザンギエフとワンピンを呼ぶように。」
「かしこまりました。」
美しい黒髪をなびかせ、ジンインらにはるか達を見張るよう命令を下したその人こそ、チャン･リンシャンその人であった。
―翌日。
(あれ？沙織がいない・・・)
始業ベルが鳴っても登校して来ない沙織。授業中にも関わらず、はるかは再三に渡り沙織の携帯にメールや電話を掛けてみたが、応答がない。昼食時間になったので、クラスメートの自転車を借り、全速力で沙織の家へとはるかは向かった。
「！？沙織のお父さん！？」
「はるかちゃん。沙織が高熱を出して大変なんだ！！」
「えっ？」
慌(あわ)てて沙織の部屋へ行くと、苦しそうに沙織がベッドに横たわっていた。

「沙織！？大丈夫？…凄(すご)い熱…。」
「うぅ…はるか。」
「おじさん。お医者さんに診(み)てもらったんですか？」
「あぁ。でも分からずじまいで…」
「…そうですか。」
「この状態が何日も続くようだと、体の衰弱(すいじゃく)が心配でな･･･」
　ごつい体格をした沙織の父だが、かなり心配しているようで、ひと回り小さく見える。はるかはそっと沙織の額(ひたい)に手を当て、内力での治療を試みたが、一向に改善(かいぜん)しない。事態に戸惑(とまど)いながらも、秀樹の元へと向かった。
「お兄ちゃん…」
「おっ、どうしたんだい？」
「沙織が高熱を出して…私のメキド(内力)でも治らないの。」
「正友から聞いたんだが、昨日何者かに襲われたんだって？」
「うん。」
「…その時、沙織ちゃんに怪我(けが)は無かったか？」
「肩口を切りつけられて…」
「そうか。」
「それは毒じゃな。」
「毒って…師匠、毒なら私のメキド（内力）で治せる筈じゃ…」
「確かに炎にできぬ事はない。じゃが、同じような力の持ち主が作った毒なら話は別じゃ。」
「それじゃ違う心拳使いが…」
「ひとまず沙織ちゃん家に行ってみよう。」
と、秀樹が言った。
　沙織の自宅へと向かうと、沙織の父がいないので、無断で沙織の部屋へと入り、医学にも精通(せいつう)している秀樹が、沙織を治そうと自らの力を使おうとしたのだが･･･

「痛ッ！！」
「どうしたの、お兄ちゃん！？」
「凄(すご)い電気が走った。」
「どういう事？」
「おそらく電気系の使い手の仕業(しわざ)だろう。電気の力で中枢神経(ちゅうすうしんけい)を狂(くる)わせ、高熱を出させる。水の力を使ったから俺はひどく感電したんだろう。」
「そんな…一体どうすれば！？」
「その発信源を叩くしかないな。」
電気と聞いたはるかの脳裏(のうり)に昨晩の出来事が甦(よみがえ)った。
(もしかして…)
「…おい、はるか。」
「えっ！何？」
「こんな所にお前宛(あて)の置き手紙があるぞ。」
その置き手紙にはこう書いてあった。

はるかちゃんへ
娘を助けたければ、一人で来いと置き文が届いた。
沙織を頼(たの)む。

「おじさんが…危ない！」
「明男(あきお)おじさんがか！？」
「お兄ちゃん！！早く助けに行かなくちゃッ。」
「あぁ。急ごう！」

その頃。徳島中心部にほど近いアスティなる複合施設(ふくごうしせつ)に、明男は駆けつけていた。
「おいっ、貴様か俺に手紙をよこしたのは？」
「フォーーーゥ！！」
「何を訳の分からん言葉を…約束通り来たぞ!早く娘を助けろッ!!」
明男が話している相手の男は、セームシュルトのような巨漢(きょかん)で、ショートモヒカンにレスリングスーツという姿が、更(さら)にいかつさを増長(ぞうちょう)させていた。おまけに左目の側の顔の４分の１近くが地肌ではなく、鉄板が埋めこまれており、右肩は大きく膨(ふく)らんでいる。
並大抵(なみたいてい)の人間ならその異形(いぎょう)に臆(おく)してしまう所だが、武道家の明男は怖れる事なく高圧的に接していた。
「おいッ、聞いてんのかお前！」
「うるさいわッ。このハゲがッ！！」
「何をッ！貴様ぁ痛めつけて吐かせてやるッ！！」
「やってみろッ、フォーーーゥ！！」
大男がそう言うと、明男の剛拳(ごうけん)が一瞬にしてアゴと腹に炸裂(さくれつ)したッ！
ドムッボムッ
重い正拳がぶ厚い筋肉をエグる！鈍(にぶ)い音が辺りに谺(こだま)したッ。
「どうだッ。吐く気になったかッ！！」
「蚊(か)でも刺したかな？」
そう言い、摑(つか)みかかろうとした大男だったが、素早さで上回る明男が今度は猛攻(もうこう)にでたッ！！
「オラオラオラオラオラオラオラーッ！！」
一瞬にして正拳七段突きを放ったーッ。
「オラーッ。死ねぇーッ！！」
トドメの胴回し回転蹴りが決まったぁーーーッ！！

ゴキッ
骨が折れたような音がした。ハイに決まった回し蹴りで、首の骨が壊(こわ)れたのかと思いきや・・・逆に明男の足の方が折れていたぁーーーッ！？
「うぐぁ！？」
「貧弱(ひんじゃく)貧弱ぅー…フォーーーゥ！！」
大男が一瞬の隙(すき)をつき、明男をはがい締(じ)めにしたッ。包み込むように抱きかかえられると、大男はその姿勢から大ジャンプをしたーーーッ！！
「ぐわぁーーーッ！？」
「フォーーーーーゥ。」
捩(ひね)りを加えたジャンプは竜巻(たつまき)を起こし、その遠心力(えんしんりょく)と腕力(わんりょく)に抵抗できない明男。シャラポワは力技で逆さに抱え直すと、弧(こ)を描きながら地上に激突(げきとつ)しようとしたーーーーーッ！！
「フォーーーーゥ！！(シャラポワスクリューパイルドライバー)」
ドゴーン・・・
豪音(ごうおん)と共に激しい土煙(つちけむり)が立ったぁーッ！明男は地面に上半身がめり込み、やがて辺りが鎮(しず)まると、逆立ちした状態の下半身が崩れ落ちたーッ。
「おじさーんッ！！」
惨劇(さんげき)を目の当たりにし、はるかが全速力で駆け寄る。
「遅かったか…。」
「お兄ちゃん、早く助け出してッ！！」
秀樹が明男を地中から引き抜くと、かろうじて息をしていた。
「よかった！まだ息がある。早く治療(ちりょう)を…」
「待ちなッ！テメェがフェニックス心拳を使うっていうガキだろ？ワシの相手が先じゃ。
フォーーーゥ！！」
「あなたがおじさんをこんな目に遭わせたの？」
「そこに転がってるザコの事か？全く歯ごたえが無かったのぉ。フォーッフォッフォッフォッ。今度はちっと楽しめそうじゃわいっ。」

「…許せないッ。」

嵐の前の静けさ。激昂(げきこう)する心が血を滾(たぎ)らせ、やがてその怒りに震(ふる)えているかのように大地が揺らぐ。地磁気(ちじき)が乱れるほどのメキド（内力）がはるかから溢れ出し、白昼(はくちゅう)のアスティは世界から孤立(こりつ)したッ。

～後編へつづく～

バトルボーラーはるか
第一集
バトルボール(神気珠玉)
第4章
美しき刺客
(前編)

http://p.booklog.jp/book/54973

著者：Ψ　(Eternity Flame)　英 樹(はなぶさ いつき)
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile

ブログ：http://profile.ameba.jp/jjmmd123/

編集：Ψ　(Eternity Flame)　秋乃空(あきのそら)
ブログ：http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへ
http://p.booklog.jp/book/54973

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/54973

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ